

1771年(明和8年)、琉球列島南部の宮古諸島や八重山諸島に明和津波が襲来した(牧野, 1968)。古文書の『球陽』によると犠牲者は約12,000名に達している(球陽研究会, 1974)。牧野(1968)は、古文書の『大波時各村乃形行書』を基に、石垣島での最大遡上高を28丈2尺(85.4m)(河名・中田, 1994による換算)とした。一方、中田(1990)は宮古島、伊良部島、下地島、多良間島、石垣島などでの明和津波の遡上高を推定した。本研究は、主な論争点となっている石垣島での遡上高を再検討する。その結果、牧野(1968)が指摘する石垣島での津波遡上高はいくつかの地域を除いて可能性が高く、また、中田(1990)の指摘する石垣島南部の津波遡上高も大局的に支持される。本研究結果から、石垣島の白保北西方での遡上高は海拔約60mに達した可能性が強く、また牧野(1968)が指摘する牧中での最大遡上高(約85m)は、宮良川を遡上した津波の収れんによる局地的な跳ね上がり現象による遡上の可能性が考えられる。石垣島のその他の地域での津波遡上高は、新川・大川・石垣・登野城(とのしろ)で約10m、平得(ひらえ)で約20~25m、大浜で約35~45mなどと推定される。石垣島以外の島での津波遡上高は、中田(1990)の見解を支持する。